

高校生親子の介護意識と介護学習に関する検討

—A 高校の親と、昨年調査の高校生の意識から—

青柳 育子

(仙台白百合女子大学)

【要旨】

高齢化がますます進むわが国の現状で、介護問題が報道されない日がない。本研究では、高校生の親に介護意識を尋ね、同様の調査を昨年高校生に実施した結果と比較し、課題を明らかにしたいと考えた。結果、高校生の親世代の介護に関する意識は子どもの性別とは関係がなかった。また、高校生は親の介護をしたいと考えるものが多いが、親世代は介護が必要になったら施設に入りたいと考えるものが多かった。多くの親は子供が介護を学校で学んで欲しいと考え、半数は自分も学びたいと思っていたが、高校生は学びたいと思うものは少なく、それぞれ世代間の意識の違いが明らかになった。介護の知識を持つ事は、超高齢社会に生きるものにとって必要なことと考える。今後、誰もが介護を学べる機会をどのように準備したらよいか課題として挙げられる。

1. はじめに

(1) 研究の背景と研究目的

わが国は世界に例のない速さで高齢化が進展し、2007年の65歳以上人口は、2740万人となり、高齢化率は21.5%となった。人口の約5人に1人が高齢者である。今後、2050年には高齢化率36.9%まで上昇すると見込まれており、そうなると、現在の高校生が高齢期になるころには、約3人に一人が高齢者の社会となる。¹⁾

高齢化の進展に伴って要介護者が増加しているが、家族の小規模化が進み、また、女性の就業率が上昇している現状では、昔のような家族介護に頼る状況ではない。そして、社会全体の期待も高まって、2000（平成20）年4月より介護保険制度が開始された。²⁾

わが国の介護保険制度は、40歳以上の者が介護保険料を支払い、一部の例外を除いて65歳以上の者が介護を必要になった時に、保険者の市町村の認定を受けて、介護サービスを1割負担で利用できるという仕組みである。しかし、特別養護老人ホームの入居希望待機者は38万人と言われ、施設に入居を希望しても数年待ちと言われ、介護施設が不足している状況がある。³⁾ しかし、最後まで自宅で暮らしたいというものも多い。そのような人や施設入居がかなわず自宅で暮らす人々は、デイサービスやショートステイ、訪問介護、訪問入浴等を利用して自宅で生活している。⁴⁾

若く健康な時期は自分の介護生活のことや、自分が親や配偶者を介護することなど考えもしないだろうが、誰もが期間の長短はあるものの人生の終末期には介護が必要になる。介護が家庭の中で行われていた時は、家庭で介護を学ぶことができたが、核家族が多い現

在は、そのような機会を持つ若者は少ない。介護を他人事のように思っても仕方がない。

昨年、高校生に介護の意識調査を実施した。結果、多くの高校生は父母の介護を行いたいと思っているが、介護を学びたいと思うものは少なかった。⁵⁾ 高校生の意識は、養育してもらい、一緒に生活している親の影響は大きいと考える。高校生の親は、介護保険を支払い、介護の現状を把握していると思うが、介護することや介護を学ぶことについてどのように考えているのだろうか。今回、世代間の介護意識の違いを明らかにして、到来する超高齢社会に対する課題を明らかにしたいと考え、親世代に昨年高校生に実施した介護意識調査と同様のアンケート調査を行った。

(2) 研究方法

調査対象：昨年高校生の調査を行った東京都内にあるA高等学校の科目「家庭」受講の2・3年生 178名の親（以下、親又は親世代）。

調査時期：2008（平成20）年、8月25日～9月15日

調査方法：学校長の許可を得て、家庭科教員が授業のはじめに調査の趣旨とプライバシー保護について説明し、親に対する無記名のアンケートを依頼した。アンケート用紙は封書に入れて配布し、1週後に回収することを伝えた。回収は80枚（44.9%）で、有効数は75（42.1%）であった。

調査内容：質問内容は、保護者自身についての事項と、介護に関する意識など12問に「強く思う」「そう思う」「あまりそう思わない」「まったく思わない」の4段階に回答を求めた。また、自由記述欄を設け、介護に対する考えを具体的に記述してもらった。

分析方法：SPSSソフトを用いて単純集計と対象者間の比較を検討するためにt検定を行った。自由記述は内容分析を行った。また、昨年行った高校生の調査結果と比較した。

2. 研究結果

(1) 回答者は、第1表のように母親が72名（96.0%）、父親が3名（4.0%）であった。年代は、第2表のように30歳代が2名（2.7%）、40歳代が55名（73.3%）、50歳代が18名（24.0%）である。子どもが男子のものが第3表のように28名（37.3%）、女子が47名（62.7%）である。また、老人ホームに行ったことのある者は第4表のように44名（58.7%）、子どもと介護の話をすると言えたものは第5表のように41名（54.7%）であった。

第1表 回答者の父母別 n=75

	実数	%
母親	72	96.0
父親	3	4.0
計	75	100.0

第2表 親の年代 n=75

	実数	%
30歳代	2	2.7
40歳代	55	73.3
50歳代	18	24.0
計	75	100.0

第3表 生徒の性別 n=75

	実数	%
女子	47	62.7
男子	28	37.3
計	75	100.0

第4表 老人ホームに行った有無 n=75

	実数	%
有	44	58.7
無	31	41.3
計	75	100.0

第5表 子どもと介護の話しをする有無n=75

	実数	%
有	41	54.7
無	34	45.3
計	75	100.0

(2) 介護に関する意識調査の結果 (第6表)

- ① 高齢社会に関心があると答えたものは 66 名 (88%) で、まったくないと答えたものはいない。
- ② 家族で介護を行いたいと思うものは 56 名 (74.7%) で、介護士にも頼みたいと思うものは 68 名 (90.7%) で、介護士にも頼みたいと思う方が 16 ポイント多い。施設に入って欲しいと思うものは 29 名 (38.7%) であった。
- ③ 自分の介護については、介護士にも頼みたいと思うものが一番多く 70 名 (93.4%) で、次が施設に入りたい 53 名 (70.7%)、子どもに頼みたいは一番少なく 11 名 (14.7%) である。

第6表 高校生の親の介護意識

n=75 上段/実数 下段/%

問	非常にそう思う 4	そう思う 3	あまりそう思わない 2	まったく思わない 1	平均値	標準偏差
1 高齢社会に関心がある	14 18.7	52 69.3	9 12.0	0 0	3.07	0.553
2 家族に介護の必要な人がでたら、介護は家族で行いたい	6 8.0	50 66.7	16 21.3	3 4.0	2.79	0.643
3 家族に介護の必要な人がでたら、介護は介護士にも頼みたい	15 20.0	53 70.7	6 8.0	1 1.3	3.09	0.574
4 家族に介護の必要な人がでたら、施設に入って欲しい	5 6.7	24 32.0	43 57.3	3 4.0	2.41	0.680
5 自分の介護は子どもに頼みたい	2 2.7	9 12.0	52 69.3	12 16.0	2.01	0.626
6 自分の介護は介護士にも頼みたい	14 18.7	56 74.7	5 6.7	0 0	3.12	0.492
7 自分が介護が必要となったら施設に入りたい	11 14.7	42 56.0	21 28.0	1 1.3	2.84	0.679
8 介護の仕事は重要である	49 65.3	25 33.3	1 1.3	0 0	3.64	0.510
9 中学や高校で介護を勉強したほうがよい	22 29.3	42 56.0	11 14.7	0 0	3.15	0.651
10 自分は介護に関心がある	12 16.0	45 60.0	17 22.7	1 1.3	2.91	0.661
11 自分も介護を学びたい	5 6.7	36 48.7	31 41.3	3 4.0	2.57	0.681
12 希望があれば子どもが介護職についてよい	4 5.3	33 42.7	29 38.7	10 13.3	2.40	0.788

- ④ 介護の仕事については、1 名を除いた 74 名 (98.7%) が重要であると考え、中学や高校で介護を学んだほうがよいと 64 名 (85.3%) が思い、自分も介護を学びたいと 41 名 (55.4%) が思っていた。また、希望すれば子どもが介護職に就いてもよいと思うもの

は、約半数の 37 名（49.0％）であった。

- ⑤ 回答の「非常にそう思う」から「まったく思わない」までを 4 から 1 までに点数化し
平均値を出すと最大値が「介護の仕事は重要である」の 3.64 で、最小値が「自分の介護は子どもに頼みたい」の 2.01 であった。

(3) 子どもの男女別などと親の介護意識

第 7-1 表と第 7-2 表は、子どもの「性別」と「子どもと介護の話をする」、「老人ホームに行ったことがある」の有無と介護意識 12 問との t 検定の結果である。表のように、子どもの男女別では、有意差のあるものはなかった。「子どもと介護の話をする」の有無では、問 12 の「希望すれば子どもが介護職に就いてよい」に有意差が認められた。「老人ホームに行ったことがある」の有無では、問 4 の「家族に介護の必要な人がでたら施設に入りたい」と問 10 の「自分は介護に関心がある」に有意差が認められた。

第 7-1 表 子どもが男女別等と問 1～12 との t 検定

	問1	問2	問3	問4	問5	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12
子どもが男女別												
介護の話をする有無												*
老人ホームに行ったことの有無				*						**		

*:p<0.05 **:p<0.01 ***:p<0.001

第 7-2 表 親の介護意識と老人ホームに行った有無・子どもと介護の話をする有無との t 検定結果

介護意識		数	平均値	標準偏差	t 値	有意確立
家族に介護の必要な人がでたら施設に入りたい	老人ホーム行ったあり	44	2.55	0.697	2.048	0.044 *
	なし	31	2.23	0.617		
自分は介護に関心がある	老人ホーム行ったあり	44	2.70	0.632	-3.367	0.001 **
	なし	31	3.19	0.601		
希望があれば子どもが介護職に就いてもいい	子どもと介護の話する	41	2.2	0.782	-2.563	0.012 **
	しない	34	2.65	0.734		

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

(4) 自由記述

第 8 表は、自由記述の全文である。記入者の 9 名は全員母親であった。記述内容の意味を考え、意味の類似したものを三段階に分類していったところ、「高齢期の生き方」と「介護の一般化」と「介護教育」の三つの内容に解釈された。

(5) 高校生と親の介護意識の比較

第 9 表は、昨年 の 第 28 回日本生涯教育学会で報告した「高校生の介護意識の実態と課題—高等学校 3 校のアンケート調査から—」の 632 名の結果と、今回の親 75 名の意識調査の結果と合わせたものである。質問の内容が一部異なるので、変形した表となっている。

- ① 「高齢社会に関心がある」ものは、親世代では 88％であるが、高校生は 52.8％で、その差は 35.2 ポイントである。
- ② 介護意識では、「介護は家族で行いたい」と思うものは、親世代では 74.7％で、高校生

第8表 自由記述

	内容(全文)	中心的意味	意味の抽象化	解釈
1	医療職についているので高齢者についての知識はこれから必要になると思うことが多い。最近特に高齢者が増えたと実感する。しかし、基本的には個人主義に時代に育った者としては家族をわずらわせることの少ない施設に入る事は、自分にとって最良のような気がする。	家族をわずらわせたくない。施設に入ることが最良	高齢期の生き方	高齢期の生き方
2	介護は必要だと思うが重度になったら家族に迷惑になるので施設に入ったほうがいいと思う。子どもの人生を変えさせるにはかわいそうなので。	介護は家族の迷惑。施設入居がよい	高齢期の生き方	
3	実際に介護に携わっていないので真の難しさは分かりません。自分の老後については考える所が多大です。	自分の老後を考える	高齢期の生き方	
4	家庭での介護は主に女性の仕事のように思われているが、男性も積極的に行うべきである。	誰もが介護に関わるべき	介護の一般化	介護の一般化
5	母が祖母の介護をしていた時に、1人では無理なことがわかりました。これからは自分も子どもたちも介護に関心を持ち、話題にしていきたいと思います。	一人での介護は無理。介護に関心を持つ	介護の一般化	
6	ホームなどのボランティアは大事。若い人たちがホームなどに行きお話を聞いてあげるだけでも心の介護と思います。	ボランティアは大事	介護ボランティアの必要	
7	仕事にはしていませんが、ヘルパー2級を持っています。今の介護職は給料が安すぎて男性が家族を食べさせるのに十分なお金はもらえません。夜勤も多いし、大変だと思います。私も介護職につきたいと思いましたが給料が安いのと時間の自由がきかない為他の職に就きました。今後介護職の環境が良くなるといいと思います。	介護に対する低い認識	介護問題	介護教育
8	介護には専門の知識がある人にしてもらったほうが介護を受ける人も楽だと思います。介護士にすべてを任せるのではなくても家族のための勉強会などに参加して少しでも知識を持って介護に当たることが必要だと思います。中学高校で学ぶ事はとてもよいことと思います。	専門職による介護が楽。介護の教育の必要。	専門職介護と介護教育	
9	本来介護は家族で行うべきと考えております。しかし、実際は厳しい現実があります。介護を子どもたちに教える事はこれから必ずやってくる現実に必要なことで、家庭で教えることができなくなってきた今の世の中、学校で介護を取り上げ、考えてくれる事はどんな勉強より一番大事だと思う。	家族介護が基本。介護教育の必要	家族介護と介護教育	

第9表 高校生と親の介護に関する意識

N=高校生632・親75 (%)

問		非常にそう思う 4	そう思う 3	あまりそう思わない 2	まったく思わない 1	平均値	標準偏差
高齢社会に関心がある	高校生	9.0	43.8	39.7	7.4	2.54	0.76
	親	18.7	69.3	12.0	0	3.07	0.55
家族の介護は家族で行いたい	高校生	23.4	51.8	22.0	2.8	2.96	0.75
	親	8.0	66.7	21.3	4.0	2.79	0.64
自分の介護は子どもに頼みたい	高校生	5.9	38.8	43.8	11.6	2.67	0.92
	親	2.7	12.0	69.3	16.0	2.01	0.63
中学や高校で介護を学んだほうがよい	高校生	6.3	22.9	41.1	29.6	2.06	0.88
	親	29.3	56.0	14.7	0	3.15	0.65
介護の仕事は重要である	高校生	49.1	45.4	4.1	1.4	3.42	0.64
	親	65.3	33.3	1.3	0	3.64	0.51
父母の介護をしたい	高校生	32.9	49.8	13.9	3.3	3.12	0.77
老後は施設に入りたい	親	14.7	56.0	28.0	1.3	2.84	0.68
自分も介護を学びたい	親	6.7	48.7	41.3	4.0	2.57	0.68
介護職に就きたい(親には、子どもの就職を聞く)	高校生	3.0	11.7	43.5	41.8	1.76	0.77
	親	5.3	42.7	38.7	13.3	2.40	0.79

※ 高校生の結果は、2007年調査のもの。

は 75.2%と同程度であったが、非常にそう思うものの割合が、親世代では 8%で、高校生は 23.4%で、約 3 倍の差があった。「父母の介護をしたい」と高校生は 82.7%思っているが、親世代は「介護が必要になったら施設に入りたい」と 70.7%が思っていた。

自分の介護については、「介護は子どもに頼みたい」と親世代は 14.7%が思い、高校生は 44.7%で、約 3 倍の差があった。

③介護の学習では、「中学や高校で介護を学んだほうがよい」と親世代は 85.3%が思い、高校生は 29.2%で、約 3 倍の差があった。親世代では、「自分も介護を学びたい」と答えたものは 55.4%であった。

④ 親世代は、子どもに「介護職に就いてよい」と 48.0%が思っているが、高校生は「介護職に就きたい」と思うものは 14.7%で約 3 倍の差があった。

⑤回答の「非常にそう思う」から「まったく思わない」までを 4 から 1 までに点数化し平均値を出すと、親も子も「介護の仕事は重要である」が最大値であったが、高校生の最小値は「介護職に就きたい」の 1.76 であった。

3.考察

(1) 介護に関する意識

親世代は、多くのものが介護は家族で担いたいと思っているが、自分の介護については、施設に入りたいと答えたものが 7 割おり、子どもに介護を頼みたいと思うものの約 5 倍であった。また、介護職が敬遠されている現状だが、親の大部分のものが介護の仕事は重要と考えており、半数のものが子どもが介護職に就いてもよいと思っていた。自由記述は、「家族をわずらわせたくない」や「施設に入ったほうがいい」のように高齢期の生き方について書かれているもの、介護について「男性も積極的に行うべき」「一人では無理」のように介護の一般化を求めるもの、「中学高校で学ぶ事はよいこと」や「どんな勉強より一番大事」のように介護教育に期待するものにまとめられた。

子どもの男女別に親の意識を比較すると、子ども数が少ないためか、「介護を子どもに頼みたい」や「中学や高校で介護を学んだほうがよい」、「介護職に就いてよい」など、性差があるように思える項目でも、差がなかった。また、老人ホームに行ったことのあるもののほうがないものより、介護が必要になったら家族に施設に入ってほしいと思っていた。行ったことのあるものは、最近の施設介護の充実を理解しているからとも考えられる。

40～50 歳代が中心の高校生の親世代は、上の世代については介護は介護士にも頼んで家族で行いたいと考えているが、自分の介護については「迷惑になる」「わずらわせたくない」の言葉に表しているように、子どもに介護負担をかけたくないと考えており、子どもに介護を期待するものが少なかった。それは、少子化や長寿化、女性も社会で働くことがあたりまえになった社会で家族介護が無理になった状況を把握していることや、介護保険制度で介護サービスを利用できるようになった事も関係するのだろう。

(2) 介護の学習について

介護の仕事については高校生も親世代もほぼ全員が重要と考えている。介護の学習は、親世代も学校で学んでないと思うが、親は子どもに中学や高校で学んで欲しいと考えるものが多かった。そして、親自身も介護を学びたいと半数が考えていた。今後、超高齢社

会を生きる者にとって介護の知識を持つことが必要と考えているのだろう。

超高齢社会を迎えるにあたり、誰もが介護を担うことになり、少子化においては一人のものが多数の親族を看ることになり、それが長期にわたることが想定される。一人ひとりが長寿を生き生きとその人らしく過ごすためには、親子だけでなく、地域でもお互いに助け合う事が必要となり、その準備の一つに介護の学習があると考え。現在、学校教育の中には介護に関する教育は用意されていない。今後、学校教育の他、誰もが介護を学べるような機会をどのように準備すればよいか考えていかなければならない。

謝辞

調査に協力くださった小出先生及び高校生と保護者の方々に心よりお礼を述べます。なお、今回の調査結果は、協力校及び親に平成 20 年 12 月に公表しました。

注記・引用文献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 18 年 12 月推計）」2006.12、pp.9
- 2) 介護職員基礎研修テキスト作成委員会「第 2 巻社会福祉制度とサービス」長寿社会開発センター、2007、pp.45～48
- 3) 「介護・医療の現実」週刊東洋経済、2007.9. 8、pp.46～47
- 4) 「四訂介護支援専門員基本テキスト第一巻」長寿社会開発センター、2007、pp.31～34
- 5) 青柳育子「高校生の介護意識の実態と課題－高等学校 3 校のアンケート調査から－」『日本生涯教育学会論集 29』、2008、pp.166

参考文献

- 1) 加藤聖子「高校生の福祉意識」『藤女子大学 QOL 研究所紀要』2007
- 2) 佐藤完「高校福祉科の設置と高校生が福祉を学ぶ意味」『高田短期大学紀要台 26 号』2008
- 3) 大前衛「高校生の福祉や家族介護に対する意識に関する研究」『添川女子短期大学紀要』1999
- 4) 内閣府平成 10 年度基礎調査「児童・生徒の高齢化問題に関する意識調査結果について」平成 11 年 9 月
- 5) 大泉哲子他「高校生の社会福祉活動に関する考察」『日本赤十字秋田短期大学紀要』1999